学内外で活躍した４年次生

出版された本を手に、自作について語る水野さん

夢は作家 目標へ着実に前進

コンクール入選作が書籍化　水野 遥香さん（文）

文学部４年次の水野遥香さんが著した短編小説『ちょっと変なだけ！』が、武蔵野文学館主催「むさしの学生小説コンクール」で優秀作品に選ばれた。入選作は『緊急文学宣言　むさしの学生小説コンクール作品集』（新潮社刊）に収められ、昨年12月に出版された。作家志望の水野さんは入選について「編集者の伴走のもと、書籍化に向けて作品をブラッシュアップした経験は今後の糧になる。自作が本になり、大変うれしく誇らしい」と笑顔で語った。

コンクールのテーマは「学校2021＋」。水野さんは「現在の大学生が置かれている状況をより多面的に知ってほしい」と、コロナ禍での大学生活のポジティブな側面に焦点を当て物語にした。サークルの飲み会などから解放され、自由な時間と豊かな生活を楽しむ主人公の姿を軽やかに描いた作品は、選考委員から「知的でユーモラス」「共感が広がりそうな説得力がある」と高く評価された。

水野さんが小説執筆に本格的に取り組むようになったのは専大入学後。自作を発表して合評を行う小林恭二教授の授業で創作技術を磨き、「自分の作品を読んでもらう楽しさを知った」。授業以外でも意欲的に創作を重ね、学内の懸賞論文・文芸作品コンクールで３年連続入賞、３年次には柘植光彦文学賞を受賞した。学外では「織田作之助青春賞」の最終候補に残るなど、「作家になる」という夢に向けて着実に前進を続けている。

卒業後はテレビ番組制作会社でドラマ制作に携わる。小説の執筆と並行して脚本の勉強も頑張りたいと語る水野さん。「目標とする作家は湊かなえさん。人の心の奥深くを描きつつ、エンターテインメント性豊かな物語を紡いでいきたい」と意欲をのぞかせる。

「専大をクリエイティブな大学に」

「アドビLab」を企画・運営　岡田 有莉夏さん（経営）

世界的なソフトウエア企業のアドビから講師を招き、プロも愛用する本格的なツールに触れながら楽しく制作・編集技術を学ぶ「専大アドビLab」。クリエイティブツールと出会って新しい世界を知ったと話す岡田有莉夏さん（経営４）が、「作品を作る楽しさを多くの人に知ってほしい」と企画し、教職員にプレゼンして実現した。

グラフィック制作、ウェブページ制作、動画編集、写真編集をテーマに１年間で４回開催した。実際に手を動かすことの面白さを伝えるべく、「習うよりつくる」をモットーに掲げる。グラフィック制作の回では、約130人の参加者がアドビのツールを使って、スマートフォンの待ち受け画像などを作った。

すべてオンラインの開催だったが、初めての作品制作に熱中する参加者たちの姿に触れ、自身もデザイン制作の楽しさを再認識。「各回の準備を進めるなかでさまざまなツールを試すなど、私自身の学びにもつながった」と手応えを語る。

制作したイベントのポスター

完成した作品の感想を述べ合うなど、参加者同士の交流も大切にしている。「学生発案のイベントなので集客に不安はあったが、教職員や石巻専修大学の学生も参加してくれて、垣根を超えた交流が生まれた」と喜ぶ。

岡田さんは１年次で参加した課題解決型インターンシップで動画を作るため、独学で動画編集を学び始めた。プライベートでも制作を楽しむかたわら、磨いたスキルを生かし、ゼミの発表資料や就職活動で企業に提出する資料なども作った。また、４年次には、アドビと経営学部との産学連携講義にも参加した。「大学生活のなかでクリエイティブスキルを発揮できる場面は多い。これからの時代、職種を問わず必要とされるスキルだと思う」と強調する。

Ｌａｂの運営は、活動を共にしてきた後輩たちに引き継ぐが、岡田さんもウェブマーケティング会社で働きながらアドバイザーとして関わり続ける。「母校である専修大学が、Ｌａｂを通じてよりクリエイティブで面白い大学になれば誇らしい」とほほ笑んだ。

アドビＬａｂを企画・運営した岡田さん

コロナ禍で身につけたたくましさ

インターンシップでキャリア磨く　藤岡 あみさん（法）

インターンシップで得た経験を語る藤岡さん

大学在学中に何かをやり切ったと思える経験や成果を手にしたい――。こう考えた藤岡あみさん（法４）は２年次から約３年間、スタートアップ企業での長期インターンシップに力を注いだ。美容店舗向け商材を扱う部門で電話営業やＳＮＳ運用に挑戦し、「自ら課題を見つけて改善する力やコミュニケーション力がついた」と手応えを語る。

人生初の電話営業には大苦戦。最初は会話が弾まず、提案する商材に興味を持ってもらえないことも多かった。録音した会話を聞き直し、周囲の助言をもらいながら対応を工夫したところ、会話が少しずつ円滑になり、アポイントメント（商談）の獲得件数も増えた。

ＳＮＳ運用業務ではインターン生のリーダーとして活躍。「さまざまな大学から集まったメンバーとの意思疎通は大変だった」が、一人一人の立場に立って考え、その成長を促すことでチームをまとめ上げた。働きぶりが認められ、インターンシップ先から新人賞が贈られた。

卒業後はウェブ広告業界に進む。「変化と競争の激しい業界だからこそ、自ら判断して主体的に動くことが求められる。在学中に得た経験を生かし、これからも自分の〝芯〟をしっかり持ってキャリアを切り開いていきたい」と力を込めた。

インターンシップに注力した３年間はコロナ禍と重なる。思い描いた大学生活とは異なったが、「コロナ禍で人とのつながりの大切さを再認識できたし、環境の変化に対応できるたくましさも身についた」と前向きに話している。

人間科学部社会学科

3人が卒論発表

人間科学部社会学科の卒業論文報告会が1月30日、生田キャンパスでの対面とオンラインのハイブリッド形式で開かれ、4年次生3人が教員や後輩らの前で卒業論文を発表した。

同学科では「文化・システム系」「生活・福祉系」「地域・エリアスタディーズ系」の3分野で代表論文を選出している。今年度は、大塚彩音さん「サービス業から男性が遠ざかることへの一考察」＝村上彩佳ゼミ▽半沢歩さん「子どもの貧困と『心のよりどころ』」＝永野由紀子ゼミ▽藏座龍丸さん「国道の記憶と表象」＝菱山宏輔ゼミが選ばれた。

3人はそれぞれの論文を発表した後、後輩たちに「就職活動の時期と重なるので、執筆を計画的に進めることが大事」（大塚さん）、「文献調査と併せてインタビュー調査も行うことで、論文に重みとオリジナリティーが生まれる」（半沢さん）、「苦労や困難も多いが、楽しみながら乗り越えてほしい」（藏座さん）とアドバイスを送った。

国道16号をテーマとした研究を発表した藏座さん

学部長賞受賞者

※敬称略、カッコ内は学年

経営学部

【国家公務員採用総合職試験合格】松田賢太郎（4）

【神奈川産学チャレンジプログラム最優秀賞】藤田千聖、高橋祥一郎、山本匠真、川嶋美羽、本田凜花、土井内俊太、菊田海星、松田敬充、宮川璃子、森本ひな（以上3）

【スピードスケート部】森重航（4）▽堀川翼（4）▽野々村太陽（3）▽菊池健太（2）▽谷垣優斗（2）▽三井晃太（2）▽笠原光太朗（1）

【ゴルフ部】福住修（2）

【水泳部（水球）】浦至児（4）

【フェンシング部】大谷謙介（2）

【ボディビル部】上野秀樹（4）

【レスリング部】岡本景虎（4）

商学部

【公認会計士試験合格】鹿島領人（4）▽小島智成（4）▽新垣翔太（4）▽宮下采子（3）▽吉田風海（3）▽相京学（3）▽山内陸矢（3）▽松下真大（3）

【神奈川産学チャレンジプログラム最優秀賞】瀬口絢太郎、清水愛理、二宮輝、柴田萌、木村琴梨、小野蒼、高田悠登、岩澤夏南、森谷友星（以上3）

【専修大学SDGsチャレンジプログラム2022学長賞】瀬口絢太郎、森谷夏子、永井稔梨、幾代遊太、矢後航（以上3）

【大学生CSVビジネスアイデアコンテスト　メンバーズ賞】林陸斗、小林銀雅、須貝郁海、上田花純（以上3）

【レスリング部】出田匠（2）▽佐藤大斗（2）

【相撲部】福田翔也（4）

【柔道部】佐藤優磨（3）

【スキー部】松本祥汰（3）

【ローラースケート部】山崎亜優（4）▽會田倫太郎（2）

ネットワーク情報学部

★学部長賞

【地域発デジタルコンテンツ　関東総合通信局長賞】今村眞夏美、佐々岡駿、八田裕貴（以上3）

【ヒーローズ・リーグ2022ルーキーヒーロー賞】伊東良太朗（2）

★学部長奨励賞

【応用情報技術者試験合格】井上翔大（4）

【国際大学対抗プログラミングコンテストアジア地区予選出場】桒山秀平、橋本拓弥、鈴木拓己（以上2）